

多義語・言い切りの「た」の習得研究

－ 中間報告 －

石井 佐智子

要 旨

中国語母語話者（以下 CS）、韓国語母語話者（以下 KS）を対象に多義語・言い切りの「た」に関して調査を行ったところ、CS にとって完了、回想が、CS、KS の両者にとって想起、確かめ、命令の習得が難しいことがうかがえた。以上から CS、KS 間で習得に相違があることがうかがわれた。

【キーワード】

多義語習得 機能語 言い切りの「た」 中国語母語話者 韓国語母語話者

1. 研究動機・先行研究

近年、多義語の習得やその習得支援に関する研究が多く見られる（今井 1993, 松田 2006, Shirai 1995）。

しかし、多義語の習得研究では、今井の「wear」、松田の「とる」、Shirai の「put」など、内容語に着目した研究が多く、機能語の多義性に着目した研究は管見の限り多いとは言えない。

内容語を扱った研究では、学習者の多義語における意味表象は点状であり、構造化されておらず、語の概念形成においては、学習者の母語の影響が見られると報告されている（今井, Shirai）。今井は、日本語を母語とする英語学習者は「着る」に対応しない「wear」の用法は習得しにくいことから、母語の影響を指摘している。

これらの研究は概念が具体的な内容語を扱ったものであるが、概念がより抽象的な機能語の場合も同様であろうか。また今井、Shirai の研究は共に日本語を母語とする英語学習者を対象にしている。しかし、母語が異なる学習者を比較した場合、習得に困難が見られる箇所には相違はあるのか、その相違は母語に起因するのかわかると明らかにする研究は管見の限り見られない。

以上の疑問を明らかにするために、機能語の言い切りの「た」を取り上げ、中国語母語話者（以下 CS）、韓国語母語話者（以下 KS）を調査対象者とし、両者の習得について調査する。

言い切りの「た」はその多義性を度々指摘されているが（尾上 1982, 寺村 1984, 三上 1953）、その習得に関する研究は、管見の限りほとんど見られない。

そして「た」に対応とされる中国語「了」は、日本語の「た」と意味用法が異なるとされているが（井上 2001）、韓国語「았/었다/였다」の意味用法は大変、類似している（井上・生越 1997）と報告されている。

以上から、対象語と調査対象者を決定した。

2. 研究目的・研究課題

多義語・言い切りの「た」における CS、KS の習得を明らかにすることを本研究の目的とし、以下の研究課題（以下 RQ）を設定した。

RQ1：CS、KS はそれぞれの用法に習得の困難があるか？

RQ2：CS、KS 間で言い切りの「た」の習得に相違が見られるか？

3. 研究方法

質問紙調査を行い、データ収集を行う。

3.1 調査紙概要

質問紙は全 25 問からなる 4 択問題を作成した。4 択は「する、ている、ていた」から成る。なお、本研究では言い切りの「た」の多義性は森田（1989）の意味分類を採用した。森田は言い切りの「た」の意味を以下のように 6 つに分類している。

- (1)過去：彼は 5 年前に博士になった。
- (2)完了：菊治は太田夫人とまともに向き合っていることに気がついた。
- (3)回想：大学生時代には、女友達から手紙が来ることがあった。
- (4)確かめ：ただ今のお話はxxx大学教授の足立幹彦さんでした。
- (5)想起：火星に衛星があったかしら？
- (6)命令：さあ、買った、買った。

質問紙 25 問のうち 12 問（6 つの意味×2 問）は「た」が適当であり、残り 13 問は「する、ている、ていた」が適当と考えられるもので構成されている。

3.2 調査対象者

調査対象者は、日本語母語話者（以下、JS）80名、CS50名、KS36名であり、3者とも東京もしくはその近郊の大学、大学院に在籍している10代から30代の男女である。JSは分析の指標とするために調査する。

CS、KSは共に日本語で高等教育を受けられる日本語能力があると想定して文系大学、大学院に所属している者に限定した。なおCSの出身国、出身地域は中国、台湾であり、中国語以外の言語が第一言語である中国、台湾出身者はデータから除外した。

3.3 データ分析方法

JSが選択したものを指標にCS、KSの回答を比較する。

4. 分析結果

質問紙調査の結果を表1-6にまとめた。()内の数字は回答者数を表している。

表1-6から、CSにとって完了、回想が、CS、KSの両者にとって想起、確かめ、命令の習得が難しいことがうかがえた(RQ1)。

そして、以上の結果からCS、KS間で言い切りの「た」の習得において相違があることがうかがえた(RQ2)。

表1：過去の結果

	JS	CS	KS
過去1	99% (79)	84% (42)	92% (33)
過去2	99% (79)	88% (44)	86% (31)

表2：完了の結果

	JS	CS	KS
完了1	96% (77)	74% (37)	91% (33)
完了2	97% (78)	<u>62% (31)</u>	88% (32)

表3：回想の結果

	JS	CS	KS
回想1	86% (69)	80% (40)	83% (30)
回想2	85% (68)	<u>44% (22)</u>	83% (30)

表4：想起の結果

	JS	CS	KS
想起1	78% (62)	<u>10% (5)</u>	<u>36% (13)</u>
想起2	90% (72)	<u>60% (30)</u>	<u>53% (19)</u>

表5：確かめの結果

	JS	CS	KS
確かめ1	90% (72)	<u>52% (26)</u>	75% (27)
確かめ2	100% (80)	92% (46)	64% (23)

表6：命令の結果

	JS	CS	KS
命令1	59% (47)	<u>20% (10)</u>	<u>10% (3)</u>
命令2	100% (80)	<u>54% (27)</u>	<u>39% (14)</u>

5. 今後の課題

CS、KSの回答数をカイ二乗検定にかけること、母語の置き換えが可能か否かを調査し、母語と習得の関係进行を明らかにすることが今後の課題として挙げられる。

参考文献

- 井上優(2001)「中国語・韓国語との比較から見た日本語のテンス・アスペクト」『月刊言語』364 大修館書店 26-31
- 井上優・生越直樹(1997)「過去形に使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」国立国語研究所編『日本語科学』1 国書刊行会 37-51
- 今井むつみ(1993)「外国語学習者の語彙学習における問題点—言葉の意味表象の見地から—」『教育心理学』41 243-253
- 尾上圭介(1982)「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1,2 17-29
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 松田文子(2006)「コア図式を用いた多義動詞『とる』の認知意味論的説明」『日本語科学』19
- Shirai, Y.(1995)“The acquisition of the basic verb PUT by Japanese EFL learners: Prototype and transfer”『語学教育研究論叢』12 大東文化大学 61-92